



このエリアに暮らす山岳民族はみな藍染めと無縁ではない。その中でレンテンの藍が脚光を浴びたのは、この黒に近い不思議な紺色のゆえなのだろう。空色の布もレンテン藍、まだ途中だというのを頼みこんで譲ってもらった。転んで泥まみれにした思い出の反物だ。



- ① 手作りの織機で丈夫な木綿布を織る
- ② 父と息子は中国から来たヤオ族、妻は当地のレンテン族だ
- ③ 庭にびっしりと干してある綿花、各家で生産している
- ④ 太めの糸を紡ぐ。男性も参加する手仕事だ
- ⑤ 家の片隅に藍の桶があり、そこが作業場だった



布を巡る旅

第4回 ～ラオス～ 幻の布・レンテンの藍

後藤ふたば

「レンテンの藍」と呼ばれる幻の布のことを初めて聞いたのは、ずいぶん前のことになる。なんでも、ラオスの北部に暮らすレンテン族（ヤオ族の一支系）が木綿を織って藍染めをしているらしい。それだけなら他の民族でもいくらもある話だが、レンテンの藍は独特の、黒々とした藍色なのだそう。いつか一度と思いつきながら、ようやくその地に足を向けたのは2009年1月のことだった。

タイとラオスを結ぶ最北の国境を越え、バスで4時間ほど走るとルアンナムターという街に着く。周辺に数多くの山岳少数民族が暮らしていることは、外国人旅行者が多く訪れることでも知られる。ゲストハウスで小さなバイクを借りて人に聞いた村に向かった。街を抜け、川を渡り、幾つかの集落を過ぎ、どうやらここらしいという村に着いた。藍色の服を着た村人が行き交い、家の庭には一面に綿花が干してある。染めたばかりなのか、紺色の布を竹竿にひらひらさせている家もある。裸足で走り回る子どもたちも、もちろん藍色の服を着ている。通りかかった人に機織りの仕草をしてみせると、近くの家に連れて行ってくれた。土間一間の家の中ではその家の奥さんが機織りの最中で、幅狭の白

い布が織機にかかっていた。単純な平織りだが、太目の糸をかなり強く叩き込んで織っている。厚手の堅牢な布がレンテン族の流儀らしい。

黒光りするような濃く深い藍色

厚手のしつかりした木綿地は染めるのが難しい。何回も、何十回も藍の染液に入れて染めていく。染め重ねることとで青はいつしか黒に近い紺になる。布の表面に藍が少しづつ重なるため、生地はごわつとした硬めのものになるが、その分丈夫にもなるのだろう。レンテン族はこの藍布を好む。

自給自足に近い暮らしをしているレンテン族は、自分が育てた綿花を紡ぎ、織り、藍で染め、手縫いして家族の服を作る。地産・地製・地消という点で、まさに幻の布である。こんな風に布を作る民族、場所は、アジア各地から急速に失われているからだ。

村の奥で「子供のころに両親に連れられて中国から移住した」と中国語で語る男性に会った。奥さんはこの村のレンテン・ヤオ族。男性は中国系ヤオ

族。奥さんが布を織り、ご主人が染める。ちょうど染め上がった布が干してあったので訊くと、12回目が終わったところだそうだった。たしかに黒に近い、鈍く光るような濃く重たい藍色だ。これからまだ6〜7回は染めると話してくれた。村の家はどこも土間一間の簡素な造りで、家財と呼べそうなものは織機のほかには鍋釜くらいしか見当たらない。数年前にブームになって高騰したと聞くレンテン藍だが、作っている彼らにはその恵みは届かなかったのだろう。

機織りを見せてくれた数軒の家で、反物を譲ってもらった。濃い藍、青、そして白。ずしりと重い反物だった。帰り道、村から遠くない坂道で、うっかりバイクごと転んでしまった。向こうから来たレンテンの女性が駆けつけてくれ、私に怪我がないか確認し、放り出された反物の土を払って前カゴに入れてくれた。その後、何事もなかったかのように去っていく女性を見送りながら、この村に、そう遠くない将来また来ることになるのだろうと思った。

こう・ふたば ● 東京生まれ、元・辺境旅系ライター。軽井沢の浅間山麓に住み、現在はデザイン・縫製を主な生業としている。布集めの旅は今も変わらず、どこへでもザックを担いで行く。布服屋リンコル店主。